魔法先生ネギま!　～暇人の転生～

裕介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　～暇人の転生～

【Ｎコード】
Ｎ０９１２Ｙ

【作者名】
裕介

【あらすじ】
何処にでもいそうな少年が死に、転生をする。転生後の姿はネギ！？神からいくつかの能力をもらいネギまの世界で悪戦苦闘（笑）をするお話です。チート、駄文、亀更新でもよいという方はぜひお読みください。

注意書き

「この小説を読むにあたっての注意」

・この小説の作者は現在高校受験の真っ最中です、途中で打ち切りや削除などをするかもしれません。

・作者は初心者です、生温かい目で見てください。

・亀更新？いいえそんなものじゃ言いあらわせません。

・クレーム等はお控えください作者の豆腐メンタルが飛び散ります。

・修正してほしいところ、誤字脱字などがあればぜひ言ってください。

これらのことが許容できない場合は、ブラウザの戻るを押すかページを閉じる、ログオフ、シャットダウン、コンセントを抜く、ブレーカーを落とす、パソコンの粉砕、家の粉砕のいずれかをやって下さい。

1話　転生（前書き）

やってしまった。ついにやってしまった。まあ、打ち切りにならないよう頑張ります。

1話　転生

俺は中学三年生だった。朝起きて、学校へ行き、帰って来て、勉強をして、寝る。日常はほとんど変化がなく、刺激も何もない平凡な時間だけが過ぎていた。このことを羨む人もいるだろう。だが、俺はこの生活に飽きていた。学校の成績のいい奴、スポーツのできる奴、イケメン、このような人たちが、この日常の主人公だとしたら、頭も普通、スポーツも人並み以下、顔もいいわけでもない俺はきっと脇役、良くて主人公の友人F程度だろうと思っていた。
ある日、また同じ日常が過ぎていくのだろうと俺はその時まで思っていた。そう、目の前に車にひかれそうになった少女を見つけた時までは。俺は気が付くとその少女を突き飛ばし、もう逃げることもできないところまで車が迫っていた。このときからの記憶はない。だが、俺はたぶん笑っていたのだろう。なぜなら俺は日常の脇役から非日常の主人公へと変わりたいと願っていたはずなのだから。俺は転生という人生の転機を望んでいたはずなのだから。

と、恰好をつけたものの、

俺「此処は何処なんだ〜！」

れれれ冷静になれ、まずは落ち着いて現状を整理しよう。

通学
←
ひかれそうになった少女発見
←
代わりにひかれる
←
白い空間←いまここ

死んでるよね！俺、ｓ「そのとうりだ。」

俺「誰だ！」

？「神だ！」

其処にいたのは金髪イケメン……死ねばいいのに。

神「神に向かって死ねとは何事だ！」

心を読まれた！神というのは嘘ではないようだな。

俺「何で神様が俺のところに？俺はただの名もなき亡霊ですよ。」

神「お前が千年に一度ぐらいでおきる世界の矛盾によって死んだんだ。実際は膨大な量の矛盾に耐えきれずに魂が砕け散ってしまうから俺ら神々が集めて直さなくちゃならねぇんだが、お前の魂は矛盾に耐えきったんだ。そこで、神々が話し合った結果、お前を転生させる事にした。転生先は【魔法先生ネギま！】で、願いは６つまでだ。それと、あの少女は助かったぞ。後遺症もない。」

まさかの転生！死んで、友人や家族に会えないのは残念だがラッキーだ。っとその前に。

俺「世界の矛盾って何だ？」

神「世界には必ず矛盾というものが生じる。それがどんどん溜まっていき世界を圧迫していった時、世界は自身を守るために一人を生贄にしてそこに矛盾を流し込むんだ。今回がお前だったってことだな。」

俺「そうか。分かった。じゃあ願いを言うぞ。
1．東方Ｐｒｏｊｅｃｔの能力
2．ＮＡＲＵＴＯの影分身
3．鍛えた分だけ強くなるステータス
4．一秒が１不可説不可説転年になるダイオラマ魔法球
5．どれだけの知識を詰め込んでも大丈夫な脳
6．俺の助けた少女を幸せにしてやってくれ。
以上だ。」

神「最後のはそれでいいのか？お前にはもう関係ないんだぞ。」

俺「特に思いつかないしな。それに目の前で人がグロ画像のようになったらトラウマだろ、それにいじめられるかもしれない。そしたら、俺のせいじゃないか。」

少なくとも俺はトラウマになるな。

神「命を助けただけでも十分だと思うんだが…。まあいい、一番問題なのは４だ。なんだ１不可説不可説転年って。何するつもりだよ。１時間もいればそこら辺の神より年上になるぞ。」

俺「修行するつもりだがダメか？」

神「まあいいや、お前はネギとして生まれる。能力とかは悪魔襲来のあとに渡すぞ。」

俺「分かった、じゃあな。」

神「ああ、気を付けろよ。

吸い込まれるぞ。」

俺の隣に穴が開いた。と同時にその穴にものすごい勢いで吸い込まれた。

俺「ちょおおおおぉぉぉ……」

～神ｓｉｄｅ～

神「行ったか。」

まあ、全力でアフターサービスをしてあげましょうかね。

1話　転生（後書き）

いかがでしょうか。はい、駄文ですね。しょうがないじゃないか！俺だって好きで駄文を書いているわけじゃないんだ！誰か俺に文才を分けてくれ！

まあ、頑張っていこうと思います。応援（してくれる人がいるかわかりませんが）よろしくお願いします。

2話　転生後（前書き）

ダメだ。駄文すぎるｗｗｗｗｗ（泣）マジで文才がほしいです。
というわけで第2話どうぞ。

2話　転生後

転生して数年が経った。ネカネ姉さんやアーニャと仲良く過ごしており、平和な毎日である。【火よ、灯れ（アールデスカット）。】も使えるようになり、おそらく悪魔襲来はもうすぐだろう。憂鬱だよ。

そんなこんなで悪魔襲来

目の前で石化する人々を見ていると逃げることしかできない自分が悔しい。そのうち、石化を解きにこよう。今はネカネ姉さんやスタンさん、父さんを探すことが最優先だ。

少年探索中

スタンさんとネカネ姉さんを見つけた。

―ザッ―

ネギ「っ！？」

後ろに悪魔が！？避けられない！

ネカネ「ネギ！」

ネカネ姉さんとスタンさんが僕を庇って石化され、ネカネ姉さんの足が砕けた。

ネギ「姉さん！」

スタン「【六芒の星と五芒の星よ悪しき霊に封印を封魔の瓶！】」

スタンさんがスライムとヘルマンと思われる悪魔を封印した。

―グガアアァァ―

また悪魔達が召喚された。一体が此方にむかって爪を振り下ろしてきた。避ければネカネ姉さんにあたる！？クソッ！

ネギ「がっ！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！背中が焼けるように痛い！他の悪魔達も近づいてくる。能力も貰えずに死ぬのか…。

―ゴゥ―

目の前の悪魔達が消し飛んだ。これは…。

？「大丈夫か！ネギ！」

ネギ「父…さん…。」

意識が消えそうになるが声の主を探すと、父さんが駆け寄ってきた。

ネギ「遅いよ…英雄…。」

そう呟いたところで意識が途切れた。

2話　転生後（後書き）

みじけぇ！すごくみじけぇ！
修正してほしいところ、アドバイス、感想、誤字脱字などがあれば言ってください。マジお願いします！

3話　神ふたたび（前書き）

木曜日・金曜日テストなんだよ……勉強なんて大っきらいだーー

ーーーーーーーーーーーーーーーー！！！

3話　神ふたたび

目を覚ますと死んだときに来た白い空間にいた。やっぱり死んだのか「いや、まだ生きている。お前の父親が魔法薬を使って治していったぞ。」ん？神様か。

ネギ「じゃあ、何で僕は此方にいるんですか？」

神「転生の特典とオマケを渡すためだ。」

ネギ「オマケ？」

神「ああ、死なないようには設定してあったが大怪我をさせてしまったからな。」

ネギ「どんなのなんですか？」

神「ああ、いくつかの武器だ。それともう1つ、お前が死にかけた事で発現した能力だ。それは……」

ネギ「それは？」

神「直死の魔眼だ。」

ネギ「此処はネギまの世界ですよ？何で型月の能力が？」

神「型月でいう根源は此処のことだからな、二回も来たら使えるようになるんじゃないか？」

ネギ「そうですか。」

神「じゃ、頑張れよ。アイテム達は影の中に入れてあるから念じたら取り出せるよ。」

ネギ「ありがとうございます。」

会話が終了したら足下に穴が開いた。

ネギ「またですかあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

ネギ「俺はあの時お約束は言わないと誓ったんだ。」

ふざけたことを言った後、とりあえず現状を確認してみた。ここは病院らしき所。近くには父さんの杖もあった。傷は痕が残っているが痛くはない。

ネギ「とりあえず誰か人をよぼう。」

俺はそう呟いてナースコールに手を伸ばした。

６年後～♪（作者の文才が足りません）

なんやかんやあって魔法学校を卒業した。え？何があったか？原作と同じだったよ。あと、タカミチにも会って感卦法や居合拳を見せてもらった。口調が変わったのは身体になじんできたからだと思うよ？

アーニャ「ネギ、何て書いてあった？私はロンドンで占い師よ。」

ネカネ「修行の地はどこだったの？」

ネギ「今浮かびあがるとこ。お…」

アーニャ「どう？」

書いてあったのは【麻帆良で魔法教師をし、２人の吸血鬼の呪いを解くこと】

ゑ？

『ええーーーっ！？』

アーニャとネカネ姉さんは校長に抗議しに行った。

原作と内容が違う？転生者ではないよね。イレギュラーかな？どちらにせよエヴァの呪いは解くべきだろうし。けど、いまのままじゃエヴァから身を守れないし。魔法球を使った方がいいかな？でも強

くなりすぎてもなぁ……。でも、吸血鬼2体はキツイよなぁ…。
そんなことを考えていると姉さんとアーニャが帰ってきた。

ネギ「どうだった？」

姉さん「変更は無理だって…」

アーニャ「もう決まっちゃったんだから頑張ってきなさいよ。死ぬかもしれないけど……」

ネギ「ちょっ、シャレにならないよ！」

アーニャ「校長はその2人はおとなしいって言ってたから大丈夫よ、きっと…」

ネギ「きっとか……まあ、死なない程度には頑張るよ。」

ネカネ「無理はしないでね。ちゃんと連絡を寄越すのよ？」

ネギ「分かってるよ。」

原作より心配してるね。まあ、吸血鬼2体だからなぁ…。早めに用意しておこう。エヴァだけでも仲良くしておけば死ぬ確率は下がるし。

～その日の夜～

ネギ「影分身の術！」

―ボン―

ネギ「それぞれに体術、魔法、東方の能力、直死の魔眼の修行をしてきて。」

入った瞬間に解除、っ！意…識が…も…う……無理…

目が覚めたら白い空間にいた。あれ？デジャブ？

神「おい。」

ネギ「神様、どうしてどうして僕はまた此処にいるんです？」

神「それはお前が神になったからだよ。しかも、最上級クラスの。」

ネギ「Ｗｈｙ？」

神「神が生まれるのは２パターンあってな。人間の信仰の集合体から神になるのと、生き物が長い時間と信仰によって変化するのだ。

お前、あの魔法球でとてつもない時間修行してただろ？」

ネギ「けど、僕は信仰なんて…。」

神「正義の魔法使い（笑）は？」

ネギ「あ。」

原作でも狂信者だったからありえるよ。

神「まあ、まだ生きているから半人半神だし大丈夫だろ。それでも魔力とか気とかは人を逸脱してるし神力も俺ぐらいはあるし、ここにも望めば来れるけど。」

まあ、目的は強くなることだったしいいよね。

神「まあ、神になったから特典として３つだけ願いを叶えてやる。」

ネギ「じゃあ、影分身を魔法にして。」

神「いいぞ。ついでに他人も使えるようになったがオススメはしないぞ、やりすぎたら脳がパンクして死ぬし。具体的に言うと急激に高熱が出て脳の細胞が死んでいって、最終的に目とか鼻とか耳から流れ出す。」

グロッ！

ネギ「それはやらせない方がいいね。考えただけで気持ちが悪くなるよ。まあ、それは置いておいて、次は魔法球と影分身を父さんの遺産ということにして。」

神「過去を変えることになるがまあいいだろ。お前の父親が俺からもらったってことにしておくぞ。もっとも、俺が神だとは知らんがな。」

ネギ「最後に攻撃を非殺傷、というより物理的ダメージをなくせるようにして。あ、でも痛みはあった方がいいかな。」

神「分かった、その力は普通に使ったら魔帆良が壊滅するしな。ついでにリミッターをつけれるようにしてやるよ。」

ネギ「ありがとう。あ、そうだ、エヴァンジェリンとは違うもう1人の吸血鬼のことを知らない？」

神「ああ、あれか。あれは俺の趣味で選んだ。まあ、転生者ではないから安心しろ。ちょっとしたクロスだと思えばいい。もしかしたらイレギュラーが増えるかもしれないけど。」

趣味にクロスか……、吸血鬼ってそんなに思いつかないけど……

ネギ「そうか、ありがとう。それじゃあ、また。」

神「ああ。あと、教えてなかったが俺の名はゼウス（仮）だ。」

ネギ「え、ゼウスって最高神じゃ……「気にするな。そんなことよりも上を見てみたらどうだ？」る？」

上に穴が開いた。そこからよくわからんモノ（リリカルな世界の闇の書の防衛システムに似てるかも）が出てきた。

ネギ「今度は上かあああぁぁぁぁぁぁ！というよりキモッ！むしろグロッ！え、おい、ちょ、おまっ！クソッ、からみつくな！ちょっ！おい、ゼウス！なんとかしろおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ………」

ゼウスの奴はいったい何時になったら普通に送ってくれるのさ。

3話　神ふたたび（後書き）

はい、駄文ですねｗｗｗもう、だめポ。

4話　魔帆良学園（前書き）

テストが終わったぜ！できは聞かないでくれ（泣）

4話　魔帆良学園

半人半神になってから一週間が経った。あと、ちゃんとリミッターはつけてるよ。今、僕は魔帆良に向かってる。原作よりは早く来ているし、タカミチ経由で学園長に絶対に部屋を用意するように言っておいた。たしか、タカミチが迎えに来てるはず……おっ。

ネギ「タカミチ～！」

高畑「久しぶりだね、ネギ君。」

ネギ「お久しぶりです。それじゃ、学園長室に行きましょうか。」

？「高畑先生、おはようございます！」

？「おはようございます。その子は？」

高畑「おはよう、アスナ君、木乃香君。この子は僕の知り合いでね、魔帆良で先生をやってもらうことになったんだ。」

アスナ「え？」

ネギ「この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです……」

アスナ「ええーーーーっ！」

み、耳が痛い…

木乃香「本当にこの子先生なん？」

高畑「ああ、彼は頭が良くてね、この歳で大学卒業程度の学力があるんだ。ちなみに、僕が出張に行っている時に君たちＡ組の臨時担任をやってもらうことになってるんだ。」

木乃香「臨時担任？」

高畑「出張ばかりでほとんど授業ができそうにないからね、もしかしたらそのまま担任になることもあるかもしれないよ。」

アスナ「え？」

アスナさんがものすごく悲しそうにしている。そして、こちらを睨んできた。僕のせいじゃないのに…

ネギ「じ、時間もないんでそろそろ学園長室に行きましょうか。」

高畑「そうだね。またね、アスナ君、木乃香君。」

～移動中～

学園長「良く来たなネギ君。」

ネギ「よろしくお願いします。」

学園長「高畑君から聞いていると思うが、A組の臨時担任と2年の英語教師をしてもらうことになっておる。」

ネギ「はい。それと修行のことなんですが、吸血鬼って……」

学園長「エヴァと忍のことじゃな。彼女らはネギ君の父であるナギ・スプリングフィールド、千の呪文の男（サウザンドマスター）が呪いをかけてこの魔帆良に縛り付けておるのじゃ。そう簡単に呪いを解いては他の魔法先生・生徒が納得せんし、呪いも簡単には解けないんじゃ。」

忍？もう一人の吸血鬼の名前かな？

ネギ「どうしたら解いてもいいんですか？」

学園長「ふむ、それは彼女らも交えて話をするから少しまっとれ。」

？「「おいジジイ！」」

誰かが来たようですね。

学園長「もう来たか。」

忍ってどこかで聞いたと思ったら化物語の忍野忍じゃないか！まあ、今は精神年齢的には僕の方が上だけどね。というより「僕」に慣れてしまったせいで一人称を「俺」にできない（涙）。

エヴァ「ナギの息子がきたとは本当か！」

学園長「その子がそうじゃよ。」

ネギ「は、はじめまして。ネギ・スプリングフィールドです。」

忍「こいつがか？そこまでバカっぽくないんじゃが？」

いや、父さんの息子だからってバカっぽくなるとは限らないんじゃ……

学園長「ネギ君は頭がいいが正真正銘ナギの息子じゃよ。」

エヴァ「で、用件はなんだ。まさかこのぼーやに会わせるためだけに呼んだわけではないのだろう？」

ぼーやは止めてほしいんだけど。

学園長「うむ、実はネギ君の修行として君たちの呪いを解けと課題が出たんじゃが…」

エヴァ「ならばさっさと解かせろ！」

学園長「じゃが、そうすると他の先生たちが黙ってはおらんのじゃよ。それに今のネギ君では解くことは無理だろう。」

忍「ならばどうするんじゃ？今すぐにでも血を吸い尽くしたいんじゃが。」

こわっ！

学園長「とりあえず、ネギ君がタカミチに強いと認めさせたら呪いを解いてもよい、と言えば他の先生たちも騒がないと思うんじゃが。」

高畑「僕ですか！？」

タカミチいたんだ……ごめん、気付かなかったよ。

高畑「（なんだか急に泣きたくなるようなことを言われたような……）」

エヴァ「それはダメと言っているようなものではないか！そんな条件認められ「いえ、僕はそれでいいです。」っ！？」

吸血鬼の二人が睨んでくるが、僕は気にせず話を続ける。

ネギ「それくらい出来ないと呪いを解けません。でも、認めさせることが出来なかったらエヴァンジェリンさんたちにも迷惑がかかるので、エヴァンジェリンさんたちが卒業するまで認めさせることが出来なかったら血を吸い尽くしてもらってもかまいません。」

学園長「ひょ？ちょ、ちょっと待つｎ「いいだろう。そこまで言うんだったら待っていてやる。」おい！エヴァ！」

エヴァ「ぼーやがここまで覚悟を決めているのにおまえが何か言うのか？」

学園長「ちょっと待つんじゃ。ネギ君、本気か？」

ネギ「はい、まあ何とかなるでしょう。できれば今夜に一度戦いたいんですけど。」

学園長「今夜！？ハァ、仕方がない。夜中の０時に世界中の前の広

場に魔法先生、魔法生徒を収拾しよう。」

ネギ「ありがとうございます。」

さて、どうやってタカミチを倒そうか。さすがに魔法は使わないとだよね。

4話　魔帆良学園（後書き）

はい、駄文です。……これがあとがきになってきてないか？
まあ、今のところは1週間に一回ぐらい投稿できていますがそのうち1カ月に1回あるかないかになってくると思います、マジすいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0912y/

魔法先生ネギま！　～暇人の転生～

2011年11月21日20時51分発行